

羨まらるべき人の一人故水野仙子氏のこと

仙子氏の晩年ふとした事から仙子氏と手紙の上での知り合になつて互に消息の往復をしてゐたが、元來讀書に懶惰な私は、その作品の一二を讀んだゞけで最近まで過ごして來た。所が今度氏の良夫川浪道三氏が故人の爲めに遺作を編輯されるやうになつたので、ある限りの作品を通讀する機會を得させていたゞいた。

故人だからとか、女だからとか、早死をしたからとかいふ僻見を捨て見て、仙子氏は優れた一人の藝術家であつたといふことが十分に出來ると思つた。こゝで私は明治以來日本に現はれ出た作家達と比較してこの申出でをしてゐるのではない。前にもいつたやうに私の讀書の範圍は極めて狭いものだから、或は女流作家の中でも優に仙子氏を凌駕する作家が數多くゐるのかも知れない。さういふ比較論になると私は發言の資格を失つてしまふ。然し私としてはかゝる比較よりも仙子氏が私の心を打つその力を云ひ現はして見れば事足りる。

第一仙子氏は女たる自分を十分に自覺し尊重してゐたやうに見える。而してそれが單に殉情的な意味に於てゝはない。女の本質を確實に探りあてそこにしつかり自分の立場を創り上げてゐた。如何しても男の想像には及ばない世界をはつきりと把持してゐた。そこに氏の藝術家としての基礎的な強味がある。第二に氏は時代の精神からその心靈に於て獨立してゐた。氏が藝術家としての訓練を受けたのは自然主義といふ雰圍氣の中に於てゝはあつたけれども、而してその境中に生活を徹底することに於て卑怯ではなかつたけれどもさうした外界の事情に押しひしやがれない尊いものを内部に蔵してゐて晩年に向ふに従つてそれが段々と光を増して來た。こゝに氏の第二の深い強味がある。

氏はまた第三に明敏な頭腦の所有者でもあつた。普通に見る女のそれとはちがつて、氏の徹視力は中途半端な所で見切りをつけるやうなことはしなかつた。その範圍は多少狹少であつた。とはいへ見たものには必ず徹底しようとする所があつた。それは氏の第三の強味といつていい。

而して仙子氏はこれらの強味を藝術家らしく自己の中に有機的に溶かし合せてゐた。氏の作品には外面的に見て人の眼を聳てしめるものはない。機智と觀察との鋭さが折々窺はれる外、これといつて際立つた表現は施されてゐない。あわたゞしい讀者は動もすると何の奇もない物語りとして大きな注意も拂はずに見遁してしまふかも知れないほどである。

然し少し氣をつけて讀んで行くと氏の作品の中からは異常な洞察と同情とが沁み出て來る。極平面的に見える描寫の中にも、書かずにはゐられないで書いたと思はれるものが明かに潜んでゐる。而してそれが借りものでは

なく、氏自身の直接な體驗を以て裏書されてゐるのが看取される。ひたむきな、見すかしのきく、その癡涙にしみつたやうな思ひやりに包まれたその心^{ハート}靈が、女らしい慎みと暖かさにと護られて靜かに外象と程々な接觸を保つてゐる。心にある傷を持った人が氏の作品に野心なく接したら、そこに必ず靜かな清らかな同情の握手を見出さずにはゐられまい。祖母といふよりも、母といふよりも、姉といふよりも、よい理解のある胸を持った女友のやうに氏の作品は人の心に觸れて來るだらう。しめやかな心でさういふ人と話をしてゐたら、むしろよくしゃしゃゐた心も自然になごんで胸の中にある暖かいすが／＼しさを感ずるだらう。さう思はせるやうな氣持ちがどの作品にも行き互つてゐる。殊に氏の早い晩年、不治の病にかゝつてからのものには、自分の傷心を離れたと思はしい傷心がある。淋しい人生を淋しいまゝに涙ぐましく慈むといふやうな深い經驗が隱見する。それは人が容易に達することの出來ない尊い境地であるといはねばならぬ。無理をせずにそこまで行くといふことはよい天分に待たなければ成立つことではない。病にかゝるといふことが決して何時でも人をその境に導いては行かぬ。驚であればこそ暗い所におかれて却てその聲を美しくし得るのだらう。私はそれ故に仙子氏が眞の藝術家の一人であつたことを痛切に思ふのだ。

今度良人川浪氏によつてその遺稿が公けにされることになつた。讀書界が生前の仙子氏を輕視した償ひとして、この書が眞面目なる讀者によつて味讀されんことを私は願はずにはゐられない。仙子氏は必ずその注意到酬ひずにはおくまい。仙子氏には子供はなかつた。氏の形見として残るものは恐らくこの一卷がその隨一であらう。小さな一卷。而かも藝術家はいつでもその質に於て判斷されねばならぬ。この小さな一卷の前に私達藝術に捧誓するものゝ幾人がよく傲顔なることが出來よう。仙子氏は藝術家としてよい一つの生活を残した。さう私は恐れずに申出ることが出来る。氏は私達によつて羨まるべき人の一人である。(了)

底本…「有島武郎全集第八卷」筑摩書房

昭和五十五(1980)年十月二十日初版発行

初出：「時事新報」大正九(1920)年五月

入力…小林 徹

公開…令和七年八月七日

リンク…[水野仙子関連の参考文献](#)